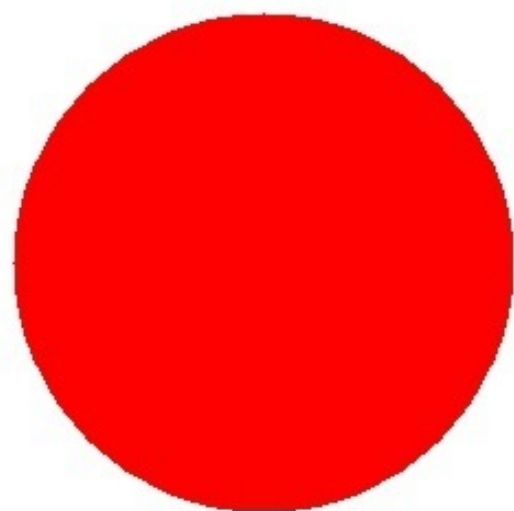


# 二千年の奏で (超長距離射程)

3.11シリーズ VIII-5  
<レンジ：第5話>



咲.

《 超長距離射程 ～二千年の奏で～ 》

彼は、手中の重みを見下ろした。

腕を上げ、唇をつける。

ひんやりとした感触は、彼に、最初の一息を躊躇させた。

顔を上げ彼は、遠く砂地にそびえたつ塔の、先端を凝視する。

核の火を満たした器が、焼けつく陽光の下で、その時を待っていた。

炸裂する光、轟音と地響き。大地が焼かれ、ゆれる……。

確認すると彼は、最初の一音を、高らかに空へと響かせた。

ためらうことも、無く…。

【 ド …怒涛のごとく… 】

夏空に光が弾け、音が、その後を追った。

熱風が草を、木を、建物を、命を焼きながら、地上を走る。

ユーラシアの東の果て…二つの火球は人の心に、その存在を刻み込んだ。

【 レ …烈火の海に… 】

水柱が天を突き、開かれた巨大な傘が、海原を覆っていく。

大気は熱く赤くたぎり、水は、高く白く泡立ちながら、繋がれた艦艇の群れを飲みこむと、遠く、その腕を広げていった。

ユーラシアの果ての果て…東南の島に、珊瑚の雪が、降る。

融けない雪は、やがて…人の肌を焼き、咽喉を焼き、命を喰らう、灼熱の炎となった。

【 ミ ...未完成の証と... 】

ユーラシアの西の地に建つ「苦艾（くがい）」と名付けられた、器...。  
熱く不安定な器の中身を、吹きあがる碎火が闇へと...解き放った。

毒の気流は星を廻り、自らの尾を喰む、ウロボロスの風となる。  
毒は地に落ち、木に草に、水へ空気へと、その姿を潜めていった。

人の舌は汚れ、影のように死が傍らにつき従い、共に未来の時を歩む。

手にした力に、人は慄いた。だが、すぐに忘れ去った...。

彼は、翼を広げ飛翔する。  
唇を舐め、息を、ととのえた。

四つ目の旋律を、人の上に響かせるため、に...。

【 ファ ... the first ...】

ユーラシアの西南...油田地帯に広がった炎は、十ヶ月ものあいだ、燃え続けた。  
煙は黒く空を蔽い、昼は太陽を失い、夜もまた、月と星とを失った。

この戦争で劣化ウラン弾は、初めての实戦使用を迎えた。  
装甲を貫通した砲弾は、溶解し、辺りに飛び散る微粒子となる。  
風に舞う核の粉塵に、敵味方、軍人、民間人...そんな区別など、あろうはずも無い。

惨禍を告げる翼が大きく羽ばたき、加速する...。

【 ソ ...そこに未来は... 】

ユーラシアの西南の地で、再び、器から解き放たれた核の塵は、立ち上る煙となって大地を、包み込んだ。

いつもと変わらぬ風景に、毒は、隠れ住む。

細胞が焼かれ、遺伝子に変異し...ゆうるりと崩れていく、命の螺旋...

異形の赤子が現実を暴いても、人は、滅びの光から逃れる道を、自ら、閉ざす。

身の内に、死を望むほどの苦痛をはらみ、それでも人は...生き続けねばならない。

【 ラ ...喇叭の音で... 】

ユーラシアの東の果てに...再び三たび、災禍を呼ぶ旋律が、鳴り響く。

水際に建つ、四つの器の蓋が開かれた。

天に...破損した建屋から、二億ベクレル超えの核種が、日々、大気中に飛び出していく。

地に...汚水タンクから、二億ベクレル超えの水が流れ出て、大地に滲みこんでいった。

海に...漏れ出た核種は大海に広がり、やがては...この星全体を汚していくのだろう...

それでも人は、繰り返す。

何度も、何度も、何度も、何度も、何度も、何度も.....。

【 シ ...射程に明日が... 】

そして彼は、最後の音を奏でるために腕を...持ち上げた。

天使の羽音が、いま.....。

※本作品は『Apocalypsis Johannis』から発想を得ていますが、これを下地にして、人工核種による環境汚染の流れを描くことを試みた、作者オリジナルの物語です。したがって『Apocalypsis Johannis』の翻訳・意識ではありません。ご了承下さい。